



アカデミックコース1期生 座談会

日時：2025年7月5日 場所：本校第1応接室

【参加者】

村越 由塁

一般入試で多摩美術大学芸術学部に進学。美術史を学びつつ、学芸員課程も履修中。

サークルはジャンベ、テクノ研究会の2つに所属している。

安原 千香子

学校推薦型選抜で電気通信大学I類（情報系）に進学。メディア情報学プログラム進学予定。

今後はAIや情報デザイン、プログラミングについて学びたいと考えている。

会計委員会とスポーツチャンバラ同好会に所属している。

福永 絵美華

総合型選抜で東京音楽大学音楽学部（ピアノ演奏家コース）に進学。

音楽に関する授業を中心に履修中。授業を通じ自身の表現方法も変化しているとのこと。ともに音楽の道を目指す仲間がいることに楽しさを感じている。個人でも演奏活動を行なっている。

●コース選択●

——アカデミックコースを選択した理由は何ですか。

安原 コース制で最初の入学生でしたが、インターナショナルコースについては事前に「数学・理科を英語で学ぶ」ということを聞いていました。私は理系に行きたいという気持ちがあつたため、英語力よりもまずは数学・理科そのものを習得し、選択肢を狭めないようにということで、アカデミックコースに決めました。

村越 私は単純に英語が苦手だったので、英語で行われる授業で何もかもわからなくなってしまうのはさすがにまずいと考えて、アカデミックコースを選びました。

福永 私も英語が苦手だったので、基礎から英語をきちんと学びたいと考えて選択しました。

安原 日本語で英語をしっかりと勉強したいということも判断材料がありましたね。

——「英語で学ぶ」かどうかというのが、ひとつ の判断基準になっていたような気がしますね。

安原 英語で他教科を学ぶ場合に、よい勉強をすれば英語も教科内容も習得できるかもしれないけれど、そこで学んだ数学を使って良い大学を目指すという場合、果たして英語で学んだ数学で通用するのかという心配はありました。

村越 インターナショナルコースの人でも理系に行きたいという雰囲気の人はいました。そのような人は、小学校のころから海外への留学を目指していた気がします。

安原 早い段階から海外に行くことを考えている人はインターナショナルコースを選んでいましたが、まだ文理で悩んでいるから「アカデミックコースにしておこう」という子が多か

った印象でしたね。

福永 英語の勉強だけではなく、さまざまな教科に関して自分で勉強時間を効率よく確保するうえでは、アカデミックコースのほうがいいかなと思いました。平日は5時間、土日だと10時間ほどピアノの練習があったので、勉強時間を確保することが課題でした。

安原 芸術系などで実技のための時間が必要な人は、アカデミックコースのほうが、授業の課題だけに時間を取られないでよいのかもしれない。

村越 1つ下の学年の（インターナショナルコースの）子でも、授業で英語を聞き取るのが精一杯で、課題を終わらせるのに苦労していたという話を聞きました。

——進路の希望とコースはどのように関連していましたか。

安原 日本の大学を受験するためには、日本語で用語を理解しないといけないというのが大変かと。英語で仕組みがわかつても、受験では日本語で答えられるようにしないといけない。高校1年生に上がるタイミングで、日本語で生物の教科書をやり直していたインターナショナルコースの子もいました。そういう意味では、インターナショナルコースはリスクな選択肢かもしれません。英語に特化したコース、というイメージ。授業自体は楽しそうだったけど。

村越 楽しいんだとは思うけど、国内大学を受けるときには、（日本の大学）受験という仕組みに自力で対応しなければならないので、そう考えるとインターナショナルコースを選ぶというのは難しい選択になると思います。もちろん英語で喋ることはこれからは重要に

なるので、インターナショナルコースを選択すること自体は大事だと思います。

安原 海外大学に進学するということであれば、圧倒的にインターナショナルコースのほうがいいと思います。

——アカデミックコースで英語力やコミュニケーション能力を伸ばす機会は。

安原 英語のレベルはどちらのコースも高いと思います。アカデミックコースでも早くに英検準1級に合格した子がいるので、英語に関しては「最後は個人の意気込み」というところもあるでしょう。自分でどれだけやるかかということに左右されると思います。

村越 どのコースであっても、コミュニケーションの力はつくのかなと思います。人に話しかけることにはあまり抵抗はないです。根が悪い人はいないという前提で、こちらがコミュニケーションをきちんと取る姿勢でいけば、相手も応えてくれるだろうなと思って行動していますね。その点は「ドミニコで過ごしたからこそ」という気がします。

●クラスの雰囲気●

——中学ではコースごと、高校ではコース混成のクラス編成でしたが、どんな違いがありましたか。

村越 中学1年生の終わり頃に新型コロナウィルス感染症が流行したため、中学時代にはコースをこえた交流の機会は少なかったです。

安原 中学2年生は休校でスタートしました。中学1年のときには通学していましたが、中学2・3年はあまり通学できていませんでした。

村越 中学校の修学旅行も行けなかった。それ

でも楽しかったけれど。

安原 中学校はコースごとのまとまりが強いという印象でしたが、高校は科目選択も別々になるので、コースの差はそこまでありませんでした。A組かB組か、という違いですね。

村越 私たちの学年はインターナショナルコース（C組）に外部生が多かったので、高校に上がったばかりの頃は、「あの人、顔は見たことがあるなあ」という感じですね。

安原 高校に進学すると、みんな小学校からいたと錯覚するほど、仲良くしていました。

村越 打ち解けていたよね。

安原 あまりコースを意識したことはなかったですね。中学校から入学した子たちも、中学の3年間でドミニコに馴染んでいったのだなと思います。

——3年間で「ドミニコ生」になる、ということですかね。

安原 中学からの人も染まっていったという感じですね。

村越 「小学校のときもいたよね？」というふうに。

安原 小学校の先生の話をして、「そういえば中学校から入学したんだっけ？」と気づくこともありましたね。それだけ雰囲気はよかつたと思います。その点、中学校のときはコロナの影響もあって、交わる機会が私たちの学年ではなかなかなかったです。

村越 コミュニケーションをとろうとは思ったけれど、タイミングが合わなかったですね。

安原 （それでも、高校で混成クラスになったときには）インターの子が馴染ませてくれたという気がします。

——受験期はどんな様子でしたか。

安原 コースによって受験勉強のしかたも違っていました。インターナショナルコースだと、日本の大学を目指す人は勉強のやり直し、海外大学を目指す人は実績づくりがメインでした。アカデミックコースの人の多くは、地道に勉強というイメージでした。

村越 英語になじんでいることのメリットもあるなと思いました。

安原 ボキャブラリーについては、日常でもネイティブの先生と話しているから、インターナショナルコースの人は強かったと思います。

村越 インターナショナルコースの英語の授業は、プレゼンテーションが多かったと聞きました。

安原 英語で行うプレゼンテーションはインターナショナルコースのほうが多いですね。

村越 嘸ることが前提になっているから、英語を使う機会が多かったと思う。頭の中で考えるよりも、まずはしゃべってみようという意味があったと思います。まずは使い続けてみる、という感じで。

安原 英語で喋ろうとしているからこそ、日本語でも喋れることが多いのかな。

村越 わからなくともとりあえず喋る、というふうに。

安原 インターナショナルコースの子は、ネイティブの先生とは英語で話していましたね。

村越 日常会話は日本語だったかな。

安原 目の前で英語を使っているというのはあまりありませんでした。ただ英語の歌を大声で歌っているということはあったかな。ミュージカルが始まったみたいな感じでしたが、それでもちょっと耳を傾けて、終わりには拍手をしていました。割とそれが日常だった気

がします。そんなふうにみんな自由にしていて、面白かったですね。

——普段の学校生活は。

安原 高校2・3年になると、コースよりも、進路によってそれぞれの過ごし方が定まっていた気がします。中学校から、場合によっては幼稚園から、という長い付き合いですから、気心の知れた間柄でした。教室を家と勘違いしているくらいの人もいたと思う。人が突然歌い出しても特に驚かないで聴いていたのは、仲がいいからでしょう。

村越 あの子はちょっとなあ、ということにはならなかった。

安原 どっちも過ごしやすかったのではないか。

村越 高校までくると、「ナゾの一体感」が生まれはじめるよね。

安原 先生がいるときといないときとで、そこまで様子は変わっていないと思います。

村越 派手な人もいたけど、おとなしい人もいる。

安原 急に踊り出したりする人もいたけど。

村越 そう言われると、いたね。

安原 自由には過ごしていたんじゃないかな。抑圧されているという人は、心の中で思っている人はいたかもしれないけど、そういう様子を見たことはないですね。

●中高時代の出来事●

——中高時代で、印象に残っている出来事は。

安原 生徒会役員として新しいことを進めたいときは、他の役員と一緒に校長先生に直接相談しました。制服にスラックスを導入することや、第2体育館に冷房を取り付けることも提案し、実現させました。校長室にはよく通つ

ていましたね。

村越 私も高校1年生のとき、放送委員としてお昼に放送するラジオ番組「ドミラジ」を立ち上げようとした際、校長先生に相談しました。先生方にもプレゼンして、実現しました。当時はコロナ禍で黙食をしていましたが、BGMがずっと同じだったので、ラジオをやってみようというノリで制作しました。

安原 まだシールドを立てて食事をしていたね。

村越 ラジオはコロナ後も時折やっていました。放送内容は、最初は生徒のお悩み相談、先生インタビューなどをやっていました。意外と先生インタビューは好評でした。収録したものを放送していましたが、本当は生放送がよかったです。

——「ドミニコ学」で何を学びましたか。

安原 プrezentationの力はドミニコ学で伸びたと思います。総合型選抜を受けるときに役立った人もいるんじゃないかな。

村越 今でも大学でプレゼンテーションをする機会があるので、そのときはあまり負担には感じないです。

安原 大学の友人の話を聞くと、ここまでプレゼンテーションやポスターセッションをしっかりやるところはないみたいです。プレゼンだけ、調べ学習だけという学校が多いなかで、1年間かけて自分で調べて後輩たちの前で発表するというのは珍しいみたいですね。人数が多くたりするため、1年間で発表するところまではいかないこともあるそうです。

村越 準備は面倒だし、「高3の1学期でもやるのか」という気持ちもありましたが、やる意味はあったと思う。私は高校2年生のポスター発表のときに、QRコードを読み取ると、実際

に探究の過程で制作した音楽を聞くことができるという工夫をしました。

——学園ではほかにどんなイベントに参加しましたか。

福永 高校2年生のときにチャリティタレントショー(注:中学高等学校のインターラクトクラブが主催するイベント。例年12月に開催)でピアノを弾く機会がありました。小学校6年生のころにもハレルヤコーラスで伴奏を務めました。

安原 もしコロナが流行しなかったら、中学のときには合唱発表会で伴奏をやっていたかもしれないね。

福永 クリスマスミサのときには、聖堂のオルガンで聖歌の伴奏をしました。信者として通っている教会でも、今、伴奏をしています。立派なオルガンのあるドミニコで経験を積めたのはとてもよかったです。

村越 音楽の先生がウキウキしてオルガンを紹介していたね。

安原 定期試験にもオルガンの音を出す仕組みが出ました。ドミニコでしか受けられない授業ですね。

●勉強や行事で大変だったこと●

——苦労したこと也有ったと思いますが、どう乗り越えましたか。

安原 ダンスコンクールのときは、クラスの中が緊迫した雰囲気になりましたね。女子校独特の雰囲気もあるとは思いますが、創作ダンスを作るうえで、得意な人の中でもビジョンが違っていたり、不得意な人もやりたいことがあったりと、それらがぶつかりやすい行事でした。おそらく1年のなかでもっともケン

力が続発する時期だと思います。

村越 あの期間中の空気は地獄でした（笑）。

安原 ただ行事が終わってしまえば仲直りできました。また学年が上がり、経験を重ねて大人になっていくと、ひとつの作品をうまく作り上げていくことができるようになった気がします。球技大会は、作品を創るというよりかは、スキルを上げて挑むという感じでしたね。

福永 球技大会は本当に大変だった。運動が苦手だったので、体育系の行事の時期はつらいこともありました。でもクラスの人がとても優しくしてくれて、何とか乗り越えることができました。

村越 「ドンマイ」と言ってくれたりして、優しかったね。場外に飛ばしたりしたときでも。

安原 体育行事では実力差が出るけど、それができるところをやっていくというか。

村越 クラス全体でカバーしているという感じでしたね。不得意な人に無理を強いることはしませんでしたね。その分、その人の得意な分野で頑張ってもらうというふうに。その点では、ダンスコンクールは例外として、クラス全体で大変なことはあまりなかった。

——担任もあの時期を迎えるときには、ある程度の「覚悟」はしています（笑）。

安原 ダンスコンクールは、中学校で多くの衝突がある分、高校ではかなりクオリティが上がる気がします。フリの間の移動も上手くなり、伝えようとするメッセージもまとまって、より完成度が高くなっていました。高校になると、自分の言葉で議論できるようになる。中学のころはそのあたりが大変でした。成長ですね。

村越 ダンスコンクールが終わった時には、「乗り越えたね」とホッとしました。

安原 そして来年までは仲良く過ごせます。終わった後にはクラスの団結力が上がります。

——ダンスを創るうえで、授業ではどんなふうなアドバイスをもらいましたか？

安原 ケチョンケチョンに言われますね（笑）。

村越 「そこがわからない」「何を表現したいの？」みたいなのはありました。ただダメ出しされたところであっても、ゴリ押ししてやつてみたら「おお！」とは言われました。

安原 最終的にはどうしてもやりたいことは通してくれた感じでしたね。客観的な立場から意見をおっしゃるので、それを取り入れるかどうかは私たち次第という感じでした。先生の意見だけで作ったということはありませんでした。

●進路の決め方●

——現在の進路はどのように決めましたか。

村越 何かひとつの分野にこだわるのではなくて、複合的な分野に取り組みたいと考えていました。音楽も作りつつ、アートっぽいこともできるという学科に行きたかったという感じです。幼稚園では絵を描くこと、小学校では漫画を描くことにハマって、中高では iPad を使って制作活動をしていました。コロナ禍のときには一番作品を作っていたと思います。そのころに作曲も楽しいと思うようになり、アプリを用いた作曲も始めました。写真部が学園祭で発表するストップモーションの BGM や、「ドミラジ」のジングルも手掛けました。美術は良い成績をとることができました。そこまで進路を強く意識したわけではなく、総合型選抜ではなくて一般入試で受験しようと思っていました。受験勉強を始めたころに「もっとたくさんのこと勉強しておけば」

と思いましたね。あとがない状態で勉強するのが大切なこと。

——安原さんは。

安原 中学校のときから理系志望で、学外では工学分野のワークショップなどに参加していました。ただ自分の学びたい分野が理系という領域に絞られるものではないと感じるようになり、理工系に特化するというよりも、他の分野と融合した分野に進みたいと思いました。数学よりも現代文のほうが得意だった気がします。そうしたなか、高校2年生のときに、感性情報学という分野の研究を進めている先生が電気通信大学にいらっしゃることを知りました。AIについての研究や、自分自身が抱えているアレルギーなどの医療分野との連携もできることに惹かれました。また研究に携わりたいということで国立大学を選びました。親には一浪をしても入学したいと伝えて一般入試の勉強をしていましたが、学校推薦をいただきことができ、12月に合格をもらうことができました。他の分野との融合的な内容をやりたい、という点が、今の進路につながったのかな。女子校から一転して男子が多い理工系の大学への進学ということで、三者面談のときには「本当にいくの?」とも聞かれましたが、自分が学びたいことに対する興味のほうが勝りました。

——今大学で学んでみてどうですか。

安原 理系がそこまで得意ではないけれども、理系に特化した人たちと一緒に勉強するので、環境的には自分に合っていると思います。もっとも、理系に行っても、理系科目に苦しんでいるという点ではみんな一緒ですね。また理系の男子は割とおとなしい印象です。

——福永さんはいかがでしょうか。

福永 ピアノを始めたきっかけは、祖母がグランドピアノを買ってくれたことです。4歳から習い始めて、小学生のときには、何もわからないながらにコンクールに出場して賞をいただけたので、やってみようかなと思いました。音楽大学に行こうと決めたのは、小学校3年生のころです。でも中学3年生から高校1年生のときには挫折続きで、「自分は一体何のためにピアノを演奏しているのだろう?」と思い、ピアノが嫌だと考えるときもありました。ただ、上手く演奏できたときには「演奏とってもよかったです」と喜んでくださる人がいらっしゃったので、諦めずに頑張ることにしました。何より「やっぱりピアノが好き」という初心に立ち返って、受験の準備に取り組みました。今でもピアニストになる夢をもって、音楽の勉強を続けています。

——ドミニコで中高を過ごすことにした理由は?

福永 音楽高校に進学することも考えましたが、当時個人で教わっていた先生には反対されました。その分、自分で何とか音楽高校の子たちに追いつこうと努力することができました。ドミニコでも先生方がソルフェージュの特訓をしてくださったり、相談に乗ってくれたりしました。ドミニコを選んで正解だったと思います。

●学園の魅力●

——これから入学を考えている人に向けて、学園の魅力を教えてください。

村越 先生との距離はけっこう近いですね。相談もしやすい。

安原 理系は選択者が少ないので、塾のような感じでした。私の学年だと物理の選択者は2人。先生と近いほうがやる気が出るという人にはいいのかも。柔軟に対応してくださったので、やりたい勉強はしやすいのかも。

村越 忙しいなか、小論文も見てくださったし。

安原 小規模校で生徒が少ないので、先生が勉強面に限らず一人一人をよくケアしてくれます。生徒同士も仲が良くて、同じ学年のメンバーで顔と名前が一致していない人はほとんどいないんじゃないかなと思います。そういう環境はなかなかないと思います。安心して通うことができました。

村越 人間関係でとてもつらい時期もありましたが、そうした中でも自分の話を聞いてくれる先生や仲間が多かったのは嬉しかったです。寛容さともいえるかもしれません、バカをやってもつきあってくれましたね。

安原 踊り出すこともあったよね。

村越 嫌なこともあるけれど、それを超えるくらい過ごしやすい環境だと思います。お互いの違いを受け入れてくれやすい、付かず離れずの関係がよかったです。

安原 グループとしてではなく、個として尊重してもらえた、という感じですね。

村越 先生も個人面談でしっかり話を聞いてくれたので、悩みがあっても学校を辞めたいとは思わなかった。

福永 困難な状況にあっても味方がいてくれたし、正しくないことには毅然と対応してくれた。仲が悪かった子とも、最後には仲良くできました。個性を大切にして、好きなことをさせてくれることも大きいですね。またフランス語や宗教など、他の学校にはない授業や教科を通じて、他の人にはない考え方や知識が得

られたというのもすごくよかったです。

村越 興味の幅は広がった気がします。

安原 国立大学の学校推薦型選抜といった特殊な受験形式でも、先生方がいろいろと対応してくれました。行きたい道が決まっている人にも、そうでない人にも対応してくれましたね。普通の学校生活を過ごしつつ、自分の好きなことができるというのは強みじゃないかな。

村越 何時間でも付き合ってくれるというのも嬉しかったですね。

安原 高校3年生のときにも、何らかの形でいろいろな先生のところに相談に行きました。

村越 先生は大変だったのではないかと思いま

すが。

安原 大学のイベントに参加するさい、志望理由書の添削も協力してくれましたね。そのおかげで、村越さんと一緒に参加した大学主催のイベントは、同じ学校から2人とも参加できるという貴重な経験ができました。

——皆さんのいろんな関心を知るといううえでは、むしろ楽しかったですよ。

安原 先生方のそうしたスタンスがいいのかもしれません。「それは無理」というよりは、「やってみるか!」という声が多かった気がします。生徒会として、学校を変えていくというときに、先生の中にも誰かしら味方がいてくれました。

村越 他の学校の話を聞くと、先生と生徒との距離が近かったんだなというのがわかる。

安原 少人数の授業で実力差があったとしても、そこに対処してくれるのも強みでしょうか。勉強が苦手だけどやる気はあるという子は伸びやすいのでは。

村越 他学年でも関わり合えるという生徒同士の近さもあるのがいいですね。

——通っていた卒業生の皆さんから見た学校の
強みというのはなかなか聞けないので、今日
いろいろとお聞きてきて大変嬉しかったです。
お忙しいところ、本日はありがとうございました。